能叢　一

特別
イ4
696
44

早稲田文庫

目録

一 熱田宮雀 天和元辛酉霜月序有 筆耕撰 神谷先生蔵

一 刷毛 二序 宝永三序有 己静撰 神谷先生蔵

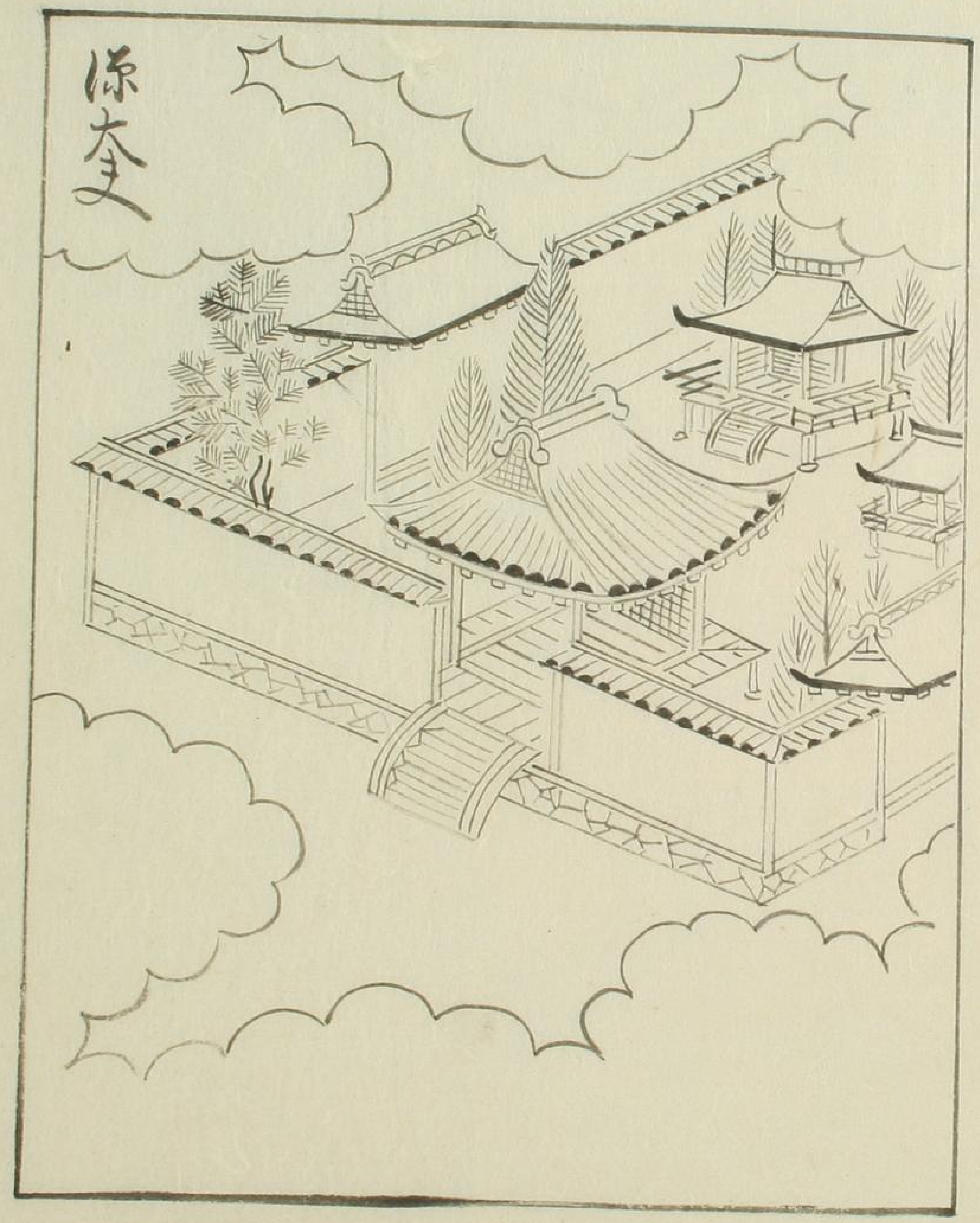
小寺贈 玉晁文庫

幾回容権

イ 4 特
696
44

なるとなる乃みそこしあやまと
ひとこゝしハものゝとれみなともと
そたこなりけれなるとまけのみなと
はまなるはうん志らひゆれなまと
心ことの葉のあはにつきなり
そこして誹諧そ今様のあはれ
ことの葉はとちひはぬといへとも
はもとれ古今集乃なみ様なして

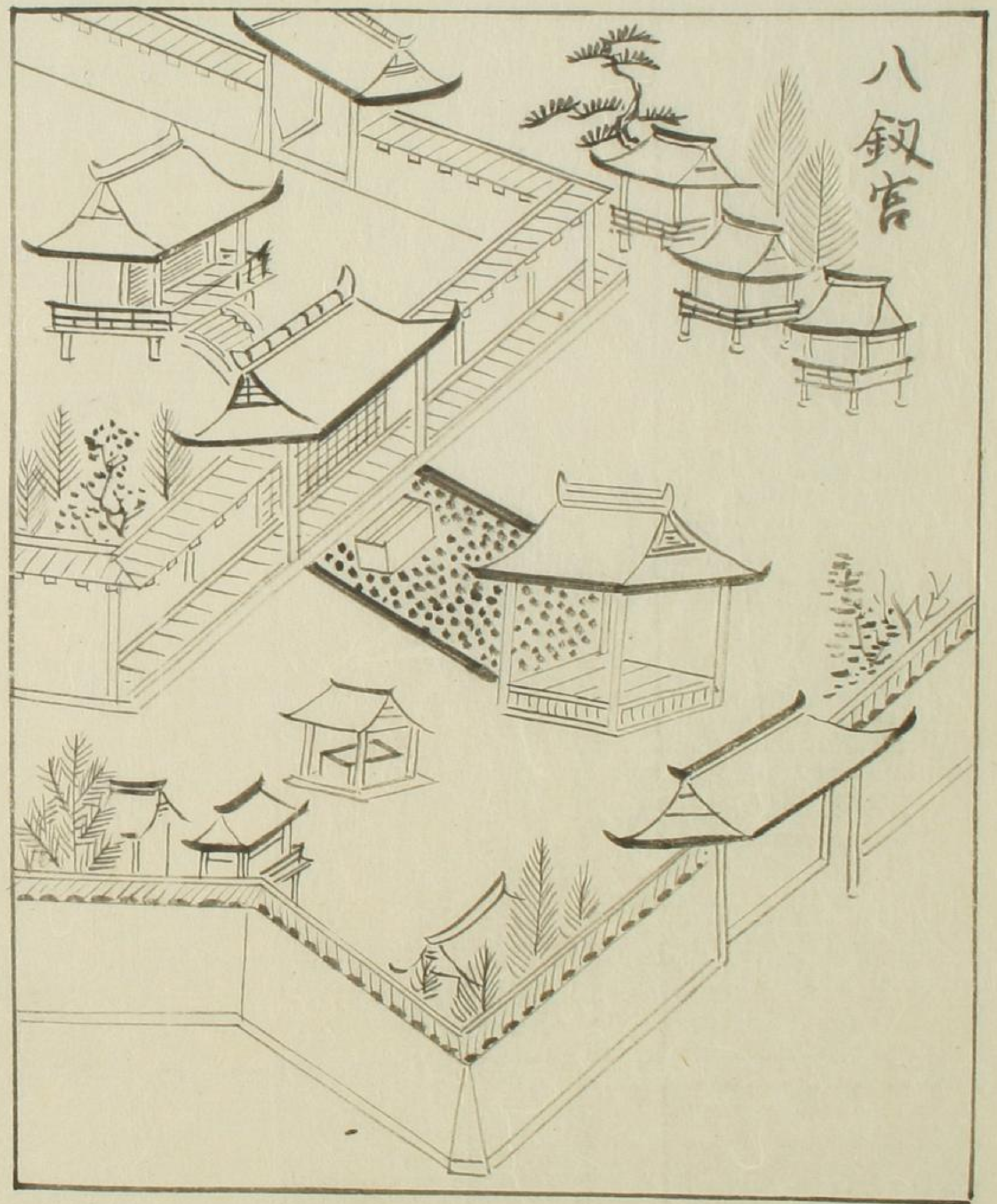
風雅のまことを傳れはうせ
世まよひも熱田乃宮のゆゑて
名あれ御神名所はあ川
祈むと はた洗川の水はくこ
はたやしまさるはれきはまら
えて宮崎とうん名つけ誹諧の
發句はあはひといへともあつま
まく宗の首はむつひをも枚乃

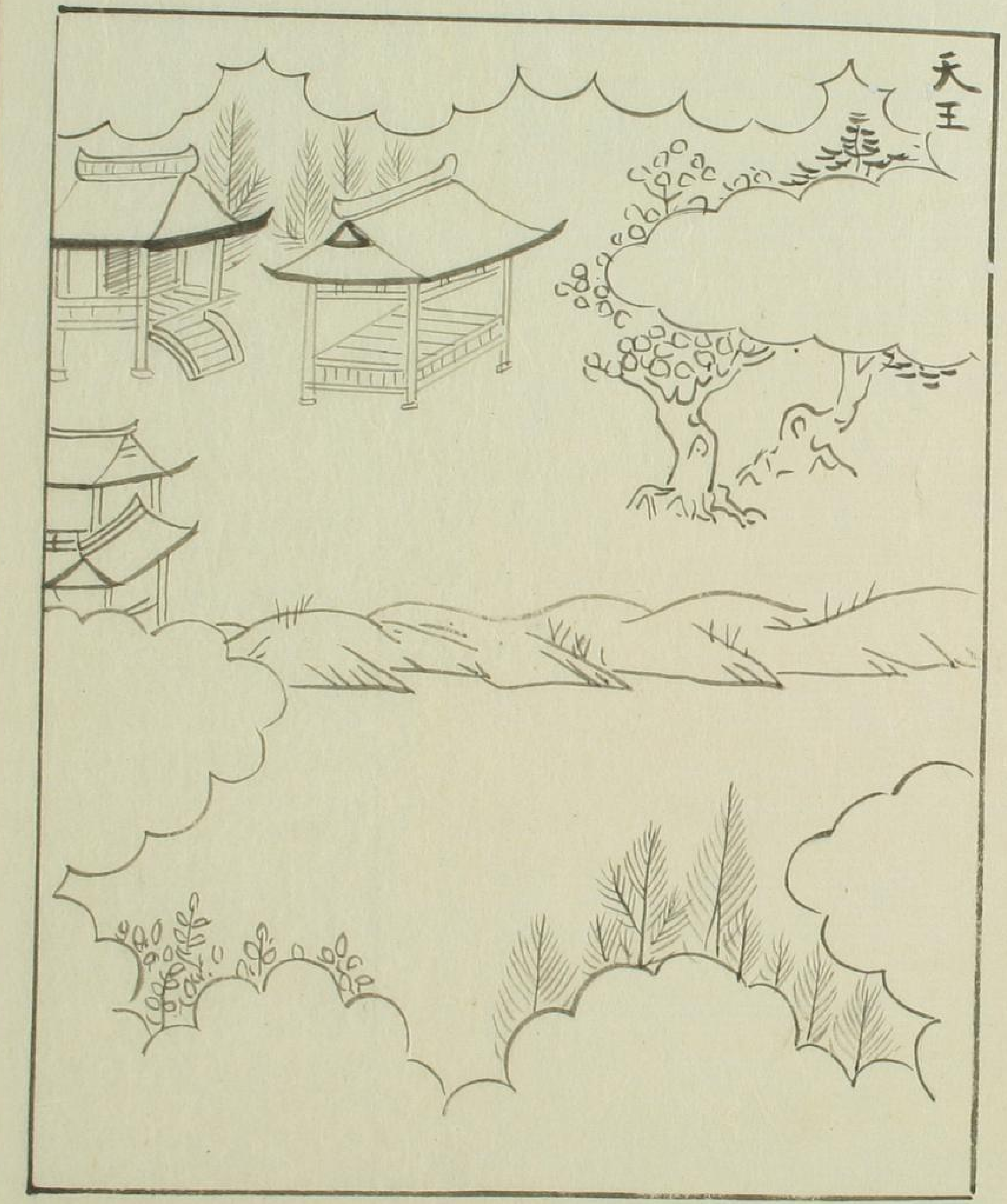


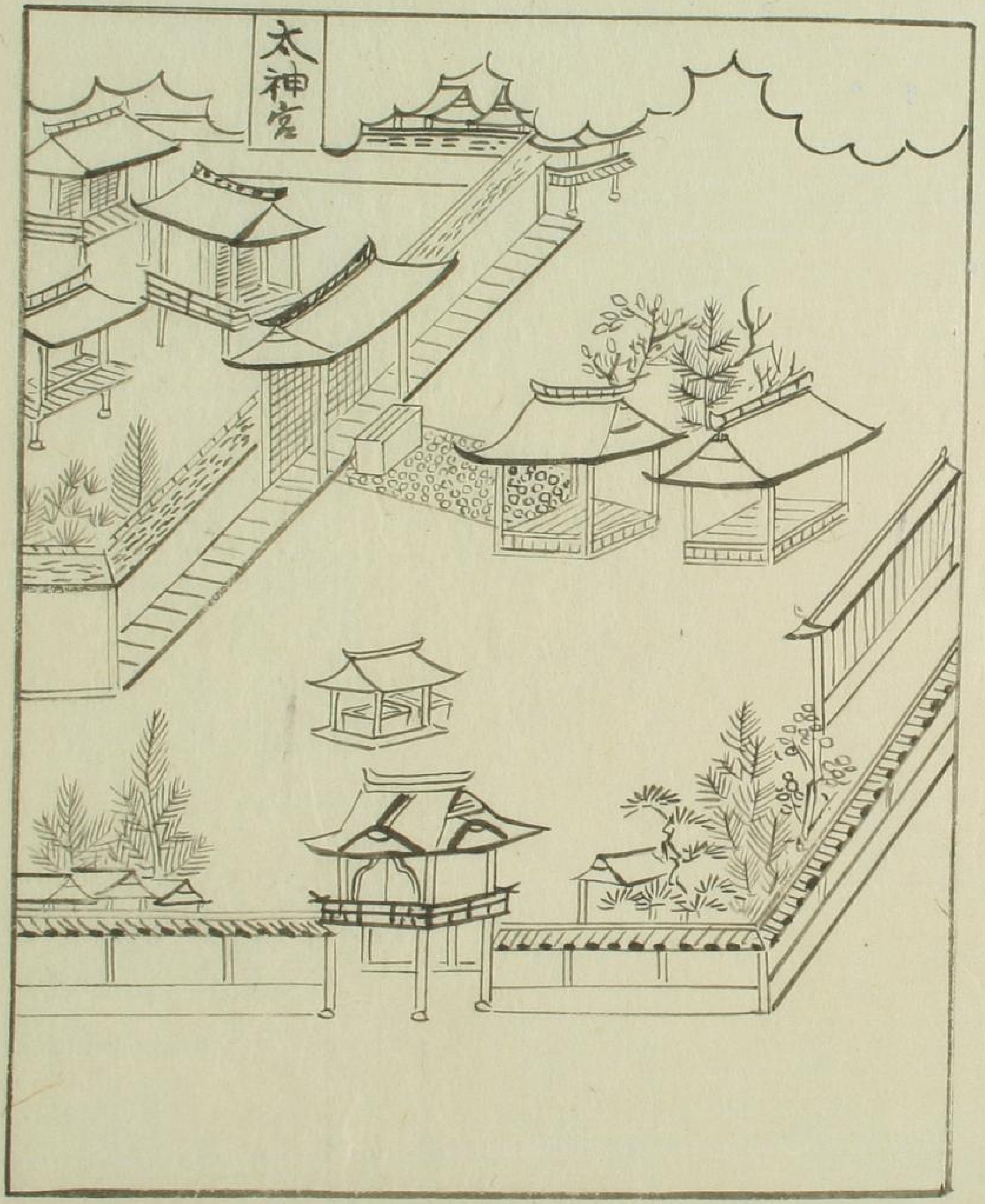
雲ばなしされは　あされりば
こつれこと　をくなりは志かは
あれくはなしわれ　もつ志れへ
しるんりしと　いさしかえと
志れをこと　志かし

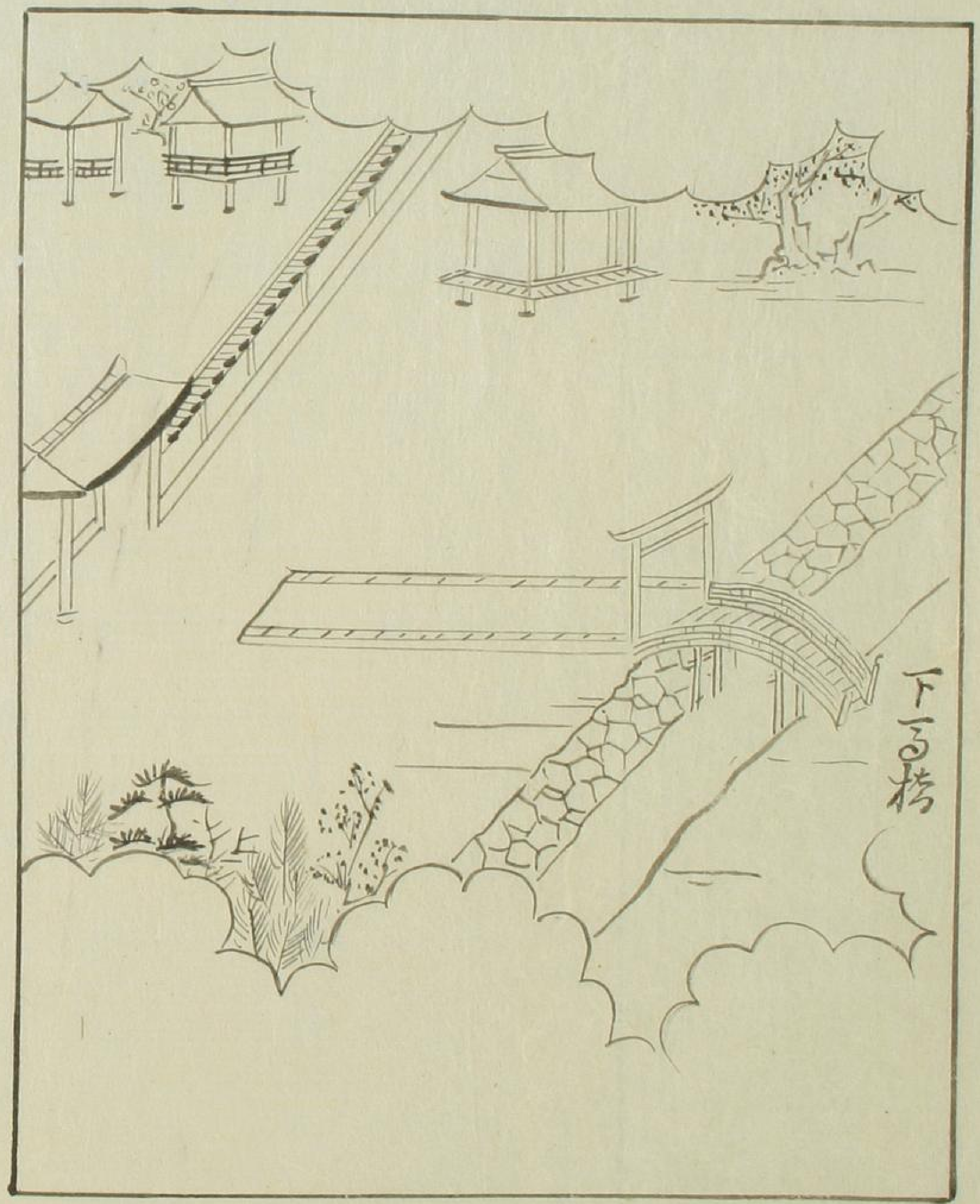
天和元年酉暦霜月日

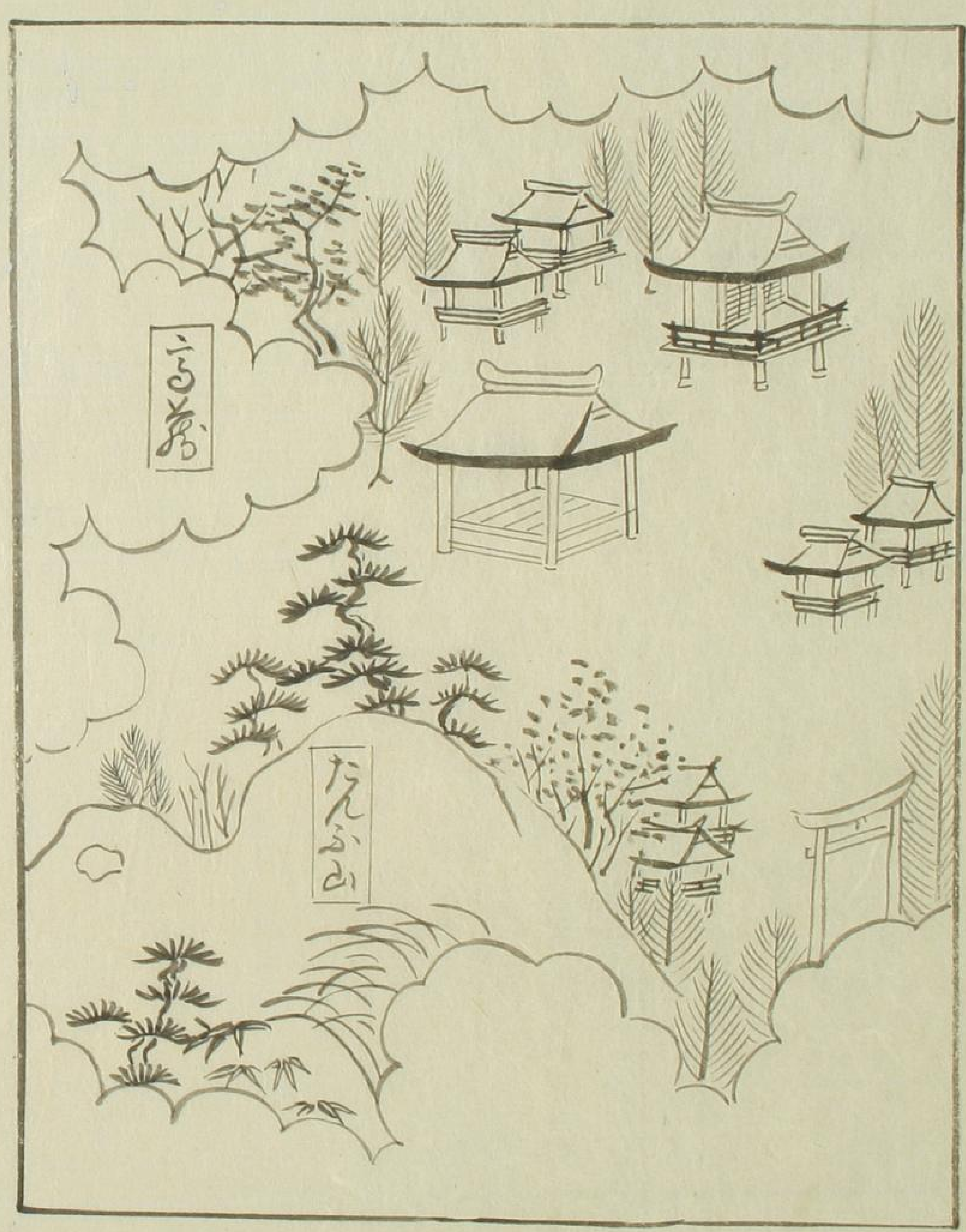
兼頼


八釼宮


天王


太神宮


下る橋



鶴岡宮雀同録

正月

裏白御饌　屠蘇酒　歯固祭

内若祝ひ　千罪六罪稜　三ヶ御供

七種の粥　代々様祭　氷ノ様祭

踏哥節会　卯杖祭　若菜

高巾子　射初祭　釣的

下地打　若波の梅

二月

初巳午祭　並ノ附御供　八醞ノ酒
柳の舞　水鳥祭　水田植祭
彩華（雪月花）
三月
初ノ湯立　蓬水餅　蓬餅
桃酒　松ノ花　糸桜
四月
花頭人　順進ノ宴　舞殿
五月

菖蒲水餅　幺顔光祭　足揃
菖蒲湯　水石投人　御幸（八月十五）
八百八ヶ所　菖蒲水酒　綸旨以載
氷上詣（付布留能）　継望以戸閉乞
六月
西竹括　城楽　天王祭
山車渡　兒舞　稚人舞
一夜酒　水争　茅ノ輪
水抜　六月晦日祓

七月

三日 大掃除　御宝物虫干　梶ノ御綿

鎮皇門開リ

八月

放生会

九月

菊ノ御酒　菊ノ御綿

霜月

初卯祭

同 書者御供　四所祭 神事之

十二月

御神楽　庭火

御煤納　竜ノ飾リ

桃内宮雀　上

神母ちらゝやまとめてそ今朝の春　伊勢山田住足代　弘氏

門松や宮雀枝のふかことり　菊頼

裏白

うら白や備りひく夢四の城　西武

うら白の備ハ卓の香妙哉　以仙

うら白や汝備ても伴蓬小袖　孤令

こゝのさわ喜やうら白流りさり　青峯

屠蘇酒

とその酒やくみをたのまるけさと春　為真

神のいさむこゝ寸ありきんとき作　定作

ゑびとその蘇の字や酒の酔ほさ　未考

歯固

たるめや顔見つくるやまた諸顔がほ　自悦

たるめやおかしもをかしやすきやうし　保友

たるめやかさうしやまとあそれ　同

打ものやたるめの名の尾張の結　以仙

御蔵祝

神さふる鑰しや御蔵祝ひの月　一雪

御蔵祝ひちらさぬ君や白鼠　以仙

祝へおくつきぬたからもくらし千とせの春　花木

子鼠六鼠祓

正月二日八劔宮社前にて人のうちとつゝりおわれかりて又のあつまり太鼓とうち鼠六鼠と唱へ列て国民よろつの悪事と兇よおはらひする祭なり

けふから如やチ歳六歳八ひ日記　芝木

三ヶ日御借

三日の内借福笑ひ七ふくあつまりけり　如心

七くさ粥

まけれし七くさ出内ヶ日七ツ過　定周

あへ宜や七くさ出ヶ内も喜ひ尽　重信

ふくろや里の七日今朝のゝ　口為

七くさや若と如へ盃とうゆれも　定愧

氷様祭

正月十日氷様祭とて氷をさらへてことさあくる年のその豊凶を知らしめのおかさまくたさせと見給ひて年のうち豊凶を占う故なり

月よらしらしと様神祭　求哂

氷様

氷の様豫め年高くありけり　京　如風

氷の様祭渡りてとく神は　旨然

饒へやゝや氷のつまき氷たり　御然

踏云花会

此殿はうべもうべも男踏歌けり　宗満
霞むしも立ち花あかん萬歳楽　流水

御杖舞

正月十四日踏歌の節会に舞人十人神の御前
にて催馬楽をうたひ十人の舞人御杖を携へ
舞也是を御杖の舞と云

君は代々ゆるきなき御杖かな　重安
ふりやかる神のきりりん御杖舞　望之

萩花

かりそめいきとして萩の花　是木

田丈ちんや志らぬ萩の花の曲　定岡

立よりまさよ見んさし萩の花　兼信

きつゝやん花の枝萩萩との　小寺　不及

民子たちろこひありや萩の花　忠栄

此所ひさしられとそ萩の花　定派

七里来寺海よういひいり萩花　自雄

高中子

正月吉神祠祝詞をあぐる時高中子の
役人へしろき立轂を掛て神楽の咒文を唱

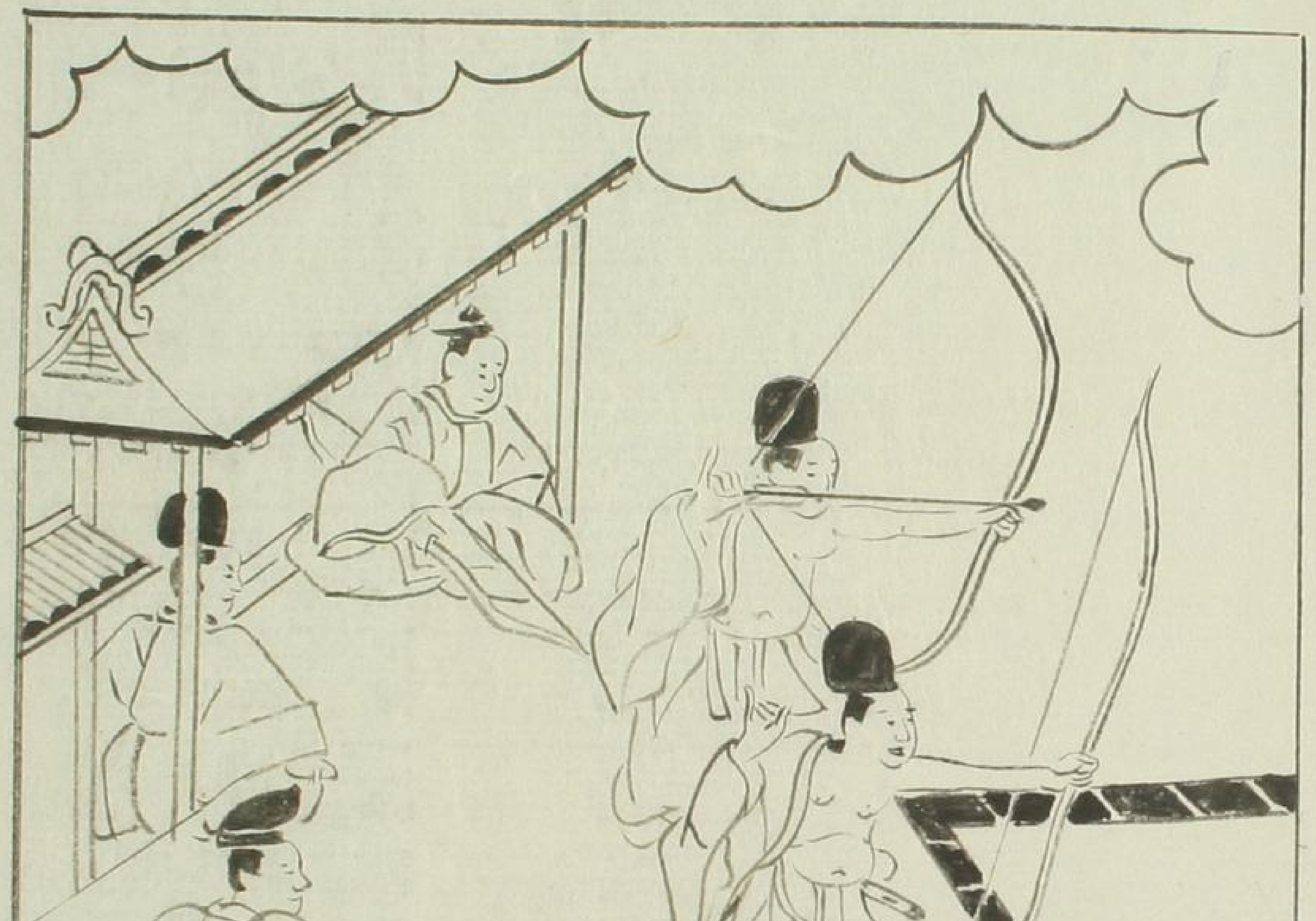
高中子見て戻り前や高天原　花木

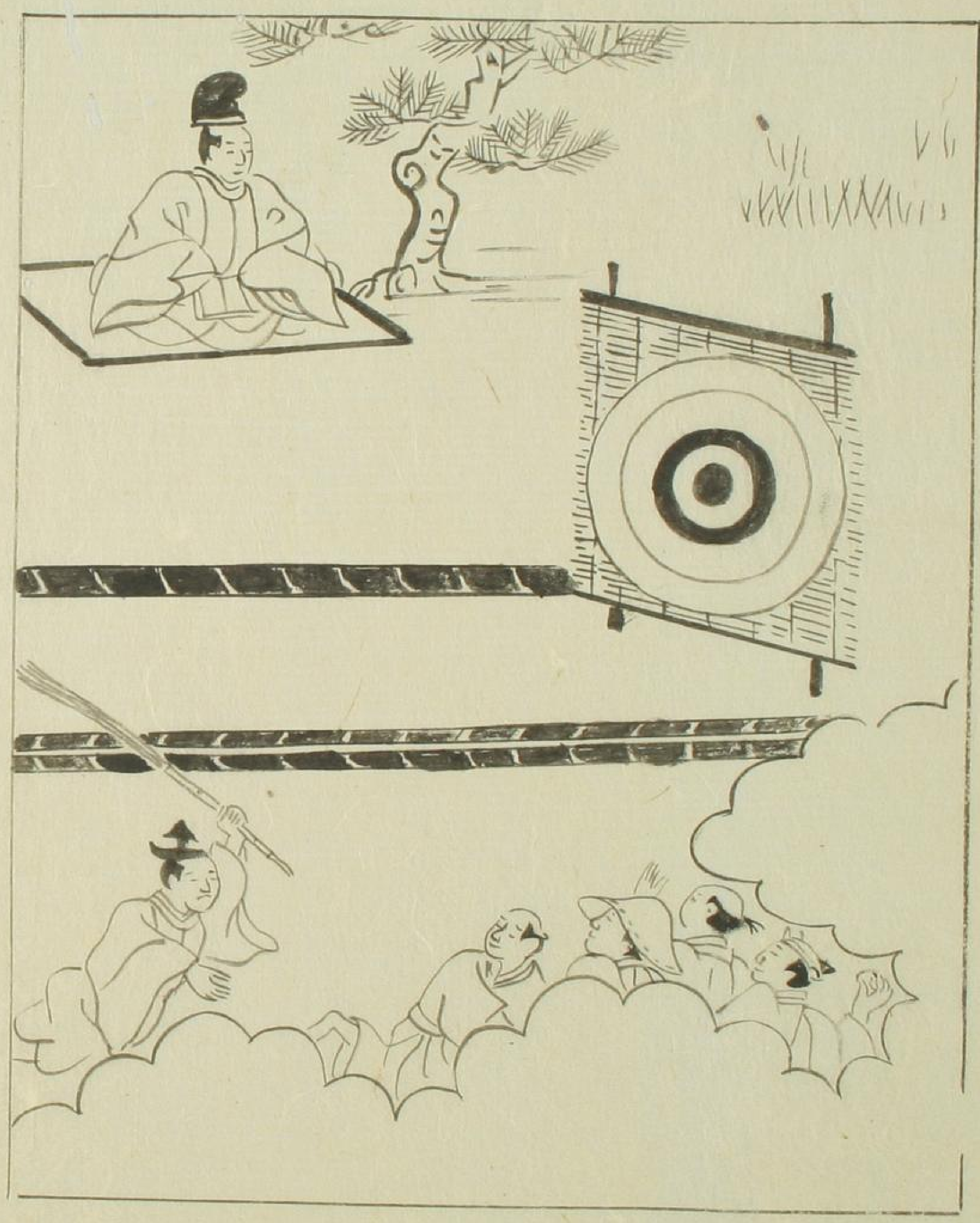
射初

射初まつれ弓矢とつて松風　安宣

ゆづちきき薄上弓弗射初哉　我卜

村祝祭今人偏よ星歌なり　保治





御的

御的に吹矢もりとか風の神　以仙

うれハたれしかてそ御的場　芝示

御的まだあしこさわかあちら声　可吉

御的ハ見さるまぬ目ンのまなか　孤令

御的や矢一つ見えぬ星を射　求吸

御的や守やことかき神の為　武下

射られ的つ川ら所ゟ招ひ　心和

たいあふやひきつり的の神祭　慶修

正月十五日童々六人まとねおりて後印
地打相等あり

印地打

京

かけろふに命しらへや印地打　和及

印地打やともをさそひて風袂　芝木

印地打まけれも四方に勝後し　云倫

印地碌鼻さるにも我慢あり　付嘆

印地打さきとかけんもおてあけなし　勝花

勝になつかしいもられるる印地打　松草

市地打なる名へ行とそのにほひかな　外山 正勝

市地打手ともおもふや つゝ鮒　成友

市地打の御ひいきそしけむ子　兼信

にほひや市地うつりしと家哉　盛敬

ふり入のなかれは市地のうら風に　元郷

男気のあつかりてたて市地縁　安宜

風は宛ま花ませいあり市地打　兼私

なかし浪の梅

なかさるや梅も無変の文字ん　花木

花はさけとまありせてはなかなほし　蒙浪

旅花枝まかへしさらまやなかし浪梅　紅に

あかむしは君子なかし浪や梅の花　可志

暮殊のうしろかけの花やなかれ梅　愚吟

なかし浪の梅そここそ家ん春ほの　西鳥

なかし浪の梅行と雅とて花盛り　重之

香なかしは前浪の梅もさそうる　口默

初巳午祭

此方かさつるまの人や 初巳午　自悦

午の時の供

まぶしさや御供の端り丑の時　芝木

八醞酒

神前に八つの酒瓶とならべてとき瓶ごとに酒をとゝのへあり

八醞の酒のたのしみや八重霞　一雪

えみちらすや添て八醞の酒の餅　治観

八醞の酒をとゝのへて濁りけり　可侑

榊葉

うるはし酒家榊の葉の袖　以仙

葉姫やさしきのこそとき八雲　定円

榊の葉ちらしよかりしぬ祭なり　政覚

拍子とてはいふまへて榊の葉　遊芳

御鳥祭

二月初の未の日と十一月初の辰の日は鳥祭あり宮人神前にて大宮にむかひてしまて声をあげ時にくしを一つひろげて御供を方(投)とり宮に飛りその時声を上げひのとゑらくいふ神秘之

双六のかんと打ても祭言葉とうさん　由平
晦日に来ぬ時そおりん祭かな　芝木
お祭や哀とさるゝ猿を鳥　同
鵜かうらうとられんおりん祭かな　保治
鳥も旅たへもおりん祭かな　昌能
家人も東をとり次の祭かな　浮木
笠縫り郭公鳴くて祝ふ神祭　中村 三雪
水の御河鳥祭れ祢宜かりせり　道佐
神のまへにるゝは打て次祭かな　一色

田植祭

雨ふらぬ次はさらに河のなか田植哉　江戸 諷和

たのしさや数珠とこそ田植祭　夜蝶

二月やりの非祭り田植哉　大野氏 不知

大ぬさや見るもあまさる田植祭　重辰

田植哉や也ちまこゝろとは民そさま　勝花

新茶

いかおや神のそなへて新茶哉　芝木

初穂の湯立

初穂のゆそへハ行の末葉かな　全入

蓬御傍

加されあゝめき茉と紙そいつとも　芝木

蓬餅

よめきも餅や三はの手のたいの粉　同

つゝとも春のなゝめや蓬餅　幽方

桃花酒

夢場こそ桃下の流をのゝ　諷和

松よ無菱

桜花ちりなん後のさまハ松よりみゆる花
とおもはんと　御社のあるあたりに松よ
り花を見て

松が花けふそまつる新念仏　季吟

京桜の松よりみゆや花の浪　以仙

花の香や松に吹くる風車　路覚

松に花や一ツの森の海ち枝　吉観

たこの気や松より見し花ふる　李右

巻きぬら松よりみゆる花ころも　自睡

鶴りや松の名かへて花の色　兼頼

糸桜

神のおよりくねといとさくら　いさ女

識ねるや琵琶八丈いとさくら　以仙

かつ風にちるやうかんり糸桜　勝花

風や針むすびもとめぬ糸桜　為竜

神風もころけハのこせいとさくら　定円

尾掛や桟を匂ふれていと桜　菱居

花の以

神代より今に酒もり庵乃春　由平
見ぬ世ちよねさまや花の春　芦水
神おまし鏡の間も夢や庵の春　一至
顔つや庵の隠りまゐらす　加山 正勝
うそのゑや今は如何なん庵の春　信口
花のいろかふらりはらりの錦哉　正慶
庵の春亭や花の大ふくさ　光如
我身庵のうちと之にけり　心友
なをさけそてうやうけ庵の春　守辰

順逆の宴

順逆のえんハ乱酒のまハり　以仙

神使ハ順逆のえんハ花やまハり　東休

釈北仏

四月八日北条の借御釈の形ぞ盛ぞ云

釈の仮ハつまハあふひとくかな　芝木

なりけりやおりへハ貝ふ釈の仮　以仙

神の威やらやまかすよるへ釈の仮　青木

神代からありけるしや釈の仮　似他

釈の般や花ハめくらきせめさ会　正策

菖蒲御傍

うきみつく菖蒲や小町形つき　要哉

白氣光祭

神代より光つる杜の七社の御神の御酒あり
五月四日北東宮人その御酒をうけ神お
の御庭先とれち清まこそり当て大
あつ丁急ぎ知し笑あてとありおりりや
神秘あるゆへ外の人ハ知るめくやのそ
志るこそ有

氣転花祭節てたちへのきはり　良次

氣転花祭気も抑てや良善庵　二兒

足拵

後くり比すりやかえて足拵　以仙

庵ひろしかりそめの足拵　時襲

もりかの上とんてこそ足拵　挹香

馬場渡り

馬場渡あつやうぬし術以人　庚人

馬ハ馬場と渡して今を知り　菊乳

御馬以人

先頭人跡も足分そや以見えん　西雲

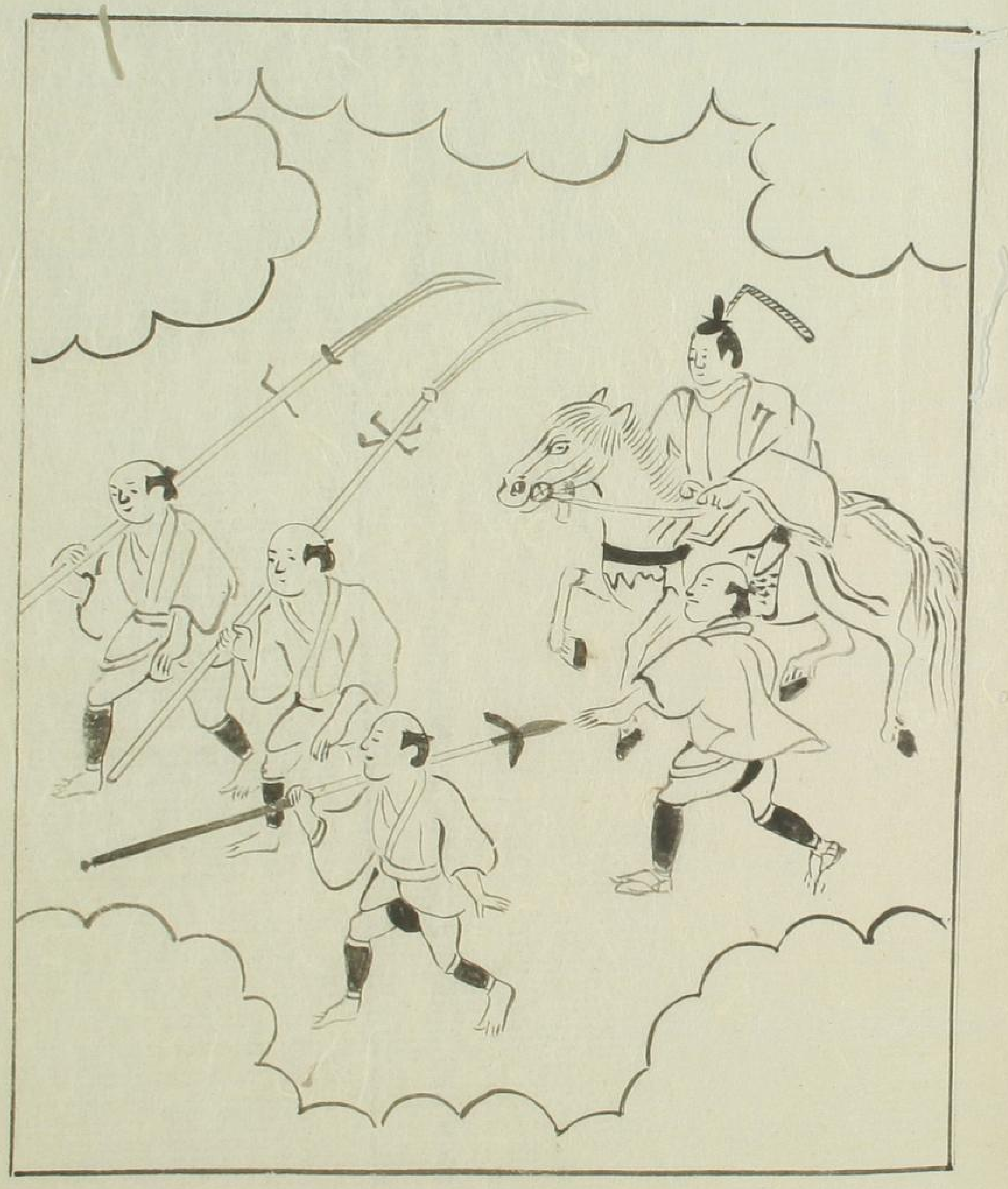
術馬以みえまつれ御寶入を　可集

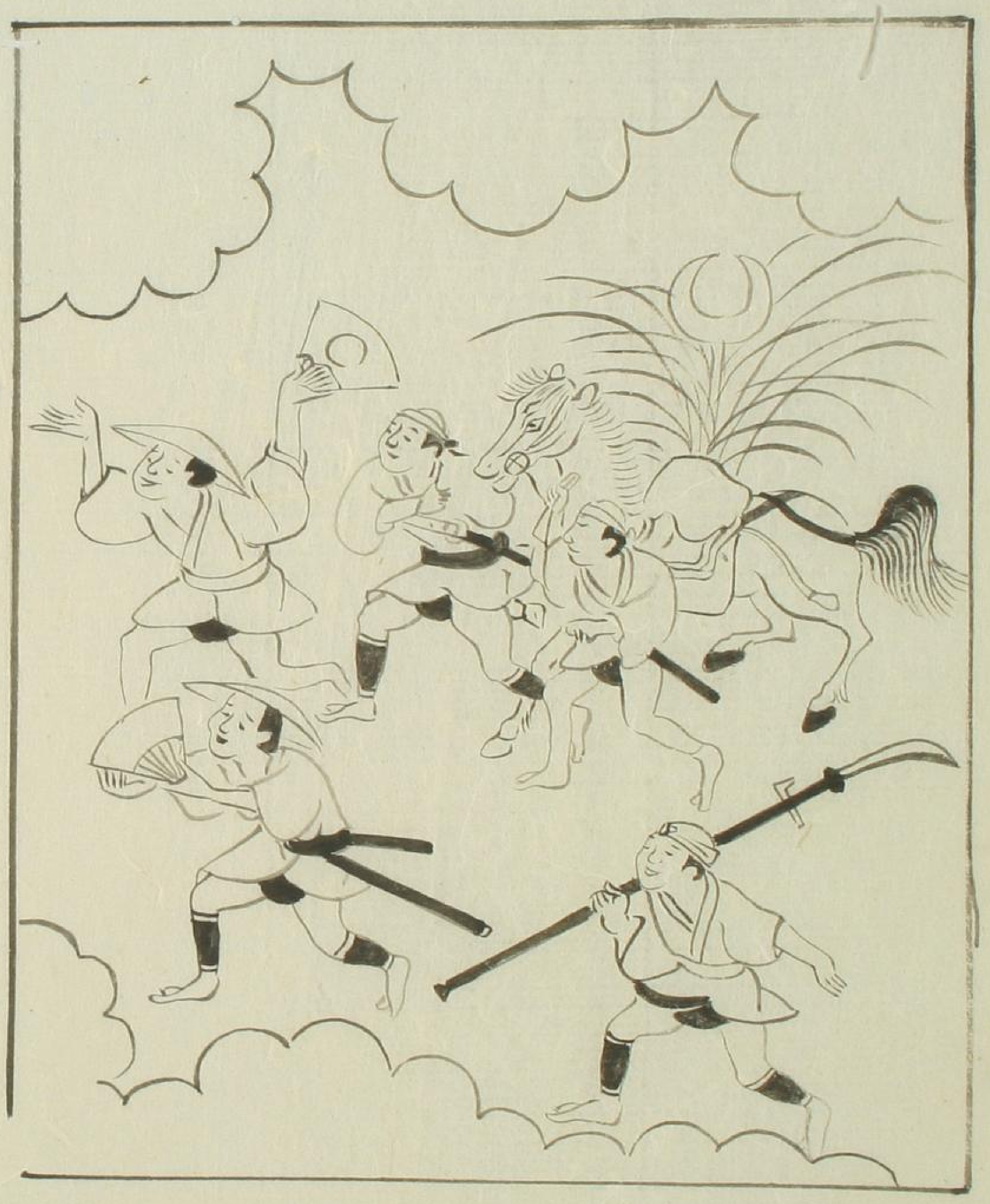
術り拍そうや拍参の馬の以　成時

いだふん神や夫ゝ先馬以　肖 不知

附馬の祭壹の隊ゝ渡しせり　定衛

以いあれと神の伝役ゝちゆうそ　由卒





御幸

それは安是まで志るしてらせり　一水

は安のさきそこのき能へつまよ　求哂

八万八千粽

行りや八万八千乃神粽　芝木

浦嶋や八万八千乃芋粽　似仙

加さねしと八万八千粽るか　正流

菖蒲の酒

つくり込や楠もゐへの菖蒲酒　江戸 兼豊

は酒は雄や柏のあやめもありけり　良次

汁椀やちよ此節かる菖蒲酒　交帆

葉もかゝる

鉢鉋の菜もうらけん　書不　以仙

綸旨頂戴

当社は祭年はちの七拾餘度年ことに神司

のとの二人神をきはれ人とかるその今はれちの

惟ま専ま身体と正しくうるはしときかな

して七拾余度は綸旨を給ね五月五日鎮皇門

の上にて景行天皇の御綸旨をいたゞき皮鉾に
もちしとあり

鹿の子にもまぎて汲戴や綸旨紙　芭木

諏皇門閉

五月五日太神氏御門へ行幸ありて同しき
日還行ありけるより其依諏とよぶ
七月朔日に開之

諏皇門花咲てその口をとらて　可也

氷上詣

氷上詣

氷上詣の祭礼　青華　西鶴
氷上は但馬にハ鷺の東社ありて
あまの若葉て来路二里五月六日神事也
猶人あまのり遊ぶみな詣て精進潔
斎をとらる故に後に鹿の子将あり

鹿の子将

鹿の子将やいぬ時ともおびゆる之　正治

忌竹指

五月晦日にかまど家中の門に竹をさし侍る

注連とは不浄をのぞくなり　六月五日よ
山車をひく祭あり

飾りたる画竹の竹やまきかけ　台然

誠示

誠示とや出車雨のしたるやあぬ　保治

天王祭

一くは四大天王まつりけり　以仙

車引や天王祭神のつな　松葉

山車波

とめくとと車波や人の山　芭木

山車志らぬ人ともいふさるや　言信

引波やさりとも有り山車　善養

兒舞

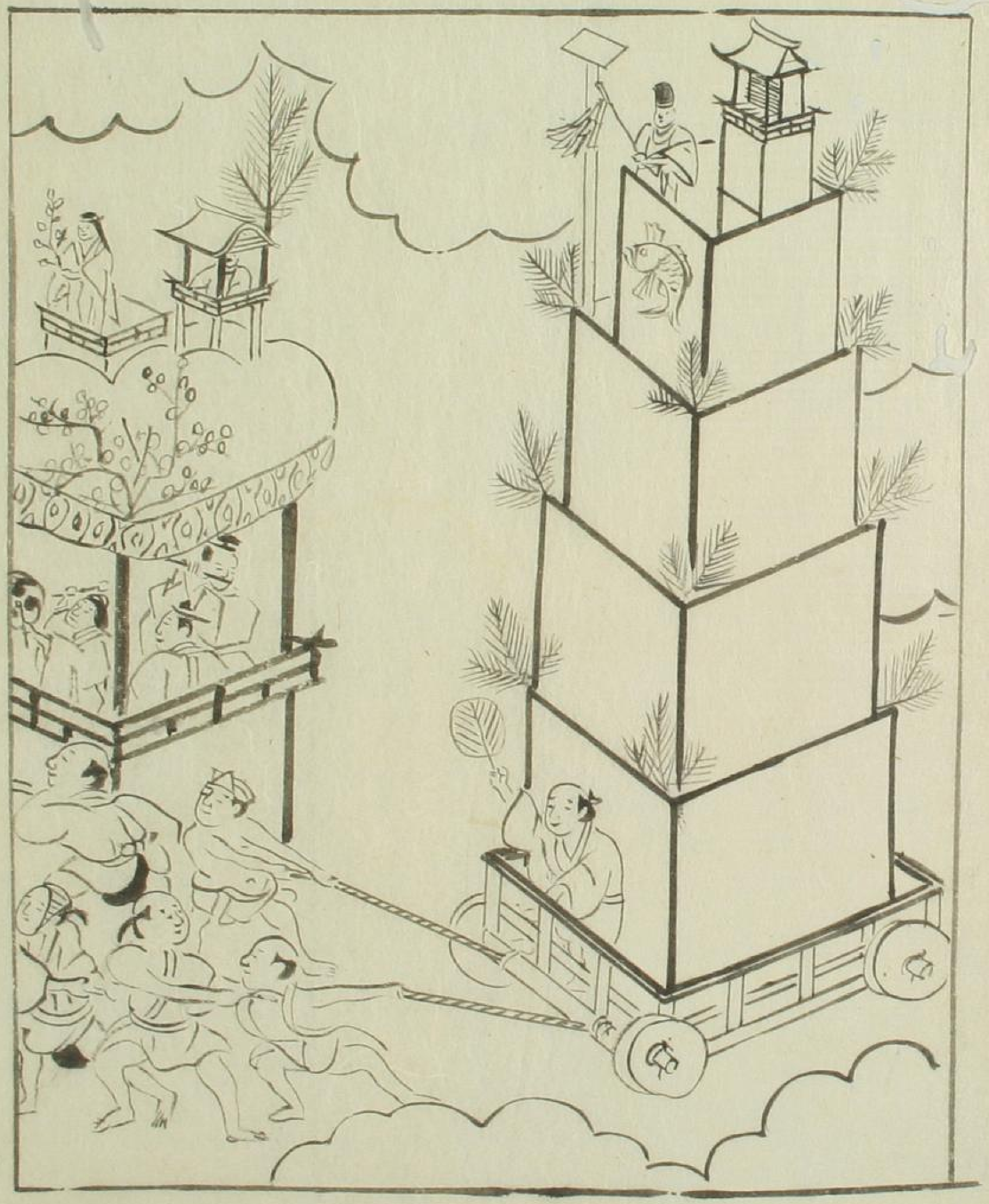
花めさるやおそろしのひそよ兒舞　芭木

打まふつるんそ兒の舞扇　同

さて神はきみなかりし兒舞　松葉

吹風や袖ひるかへる兒舞　保治

志つ西付るやちるるひ神は兒舞　林卜



伶人の舞

伶人の舞やおきり袍いろん　以仙

伶人やめんくさんき舞の袖　芝木

一来酒倦る

そなへんと通来よやちよと一来酒　笑魚

一来酒や柳二本の丸夜のうへ　时親

御身

かとの舞うりこまるや霰の飯　每延

茅丸論

ちけの輪や神のおもかけ見り　芦居

流螢

憲家たち居の蔭や流螢川　江戸 吟松

人形よなき名おかせそ流螢　虎竹

比浦の流螢そ夜の雨ふし　以仙

故のしるや清風とおし夕螢　流水

こか月螢

こかつき螢かせと八夏おりし　安宣

忘せし分情残もこか月ちるの　芝木

大掃除

ちりきりは里民やあつまる大掃除　可去

人ことは姓名や江戸大掃除　吉親

御造営ありての後や大掃除　今春

往昔や昔の御ふとさま大掃除　但化

神の場やちりはましのる大掃除　志下

心のちりはらひてもや大掃除　定雅

御寳物虫干

御寳物や虫干ハちるその加る梅屋　笑与

虫干やそのみ月の七日のは　重正

桃花勝

一葉のゆまや桃の流さり　忠重

諸皇門開ク

諸皇のあつまるやひらく神庭　重信

放生会

神も菓のひれはなはれり放生会　重安

うきとれや生るを放つ神庭　松葉

鵜つかひも生るを放つ川瀬かな　自入

菊酒附る

むさし野はあらぬといふは菊樽　西武
ひのはやも折そへて菊のさけ　横双
さぞな命か延んとそおもふ菊の酒　一入
白菊や折袖香ふ菊の酒　以仙
菊の花酒やなにそのつゝみ移り香　芭水
とりえや萩らかけ菊酒　定頼
中々のいらぬこそよし菊の酒　村俊
今日は酒菊のかさしや二三盃　不時

九日　訪へ菊の白酒にやまま　重之
　菊の綿
折せ比ねりきうや菊のお花川に　一雪
　初卯祭
東よりなれや才卯の祭　宗鑑
　御妻戸御供
神殿の後ゟ俳ゟ借御之神秘なりけりや
御供備ふ妻戸とさきまいる御師　芭水
田刈祭

兄弟も目出あふまつり祭かな　松葉

三月ハ世よ祭ハ拙も人なかり　是仲　不及

神酒そあふるゝ御神祭　夢下

四月祭人ハらんみところ〳〵　秀信

御神楽

篝火のかりそもほのし神楽哉　大坂　重安

神楽にや咲人よよ書々へし　西笑

神の場や穢むゝ光る神楽火　宗悦

神楽舞や皆一同よ寿もあけ　永好

さゝもやかへる御神楽歌かなて　未鳴

つれぬ篝や夜もすから神楽おめこ　始興

太刀丸女御殿や神神楽　心計

雲ゐや神楽と舞ゝて音の鼓　但佗

庭火

神おもよ光りとかさる庭火かな　西笑

庭火ハ神いあらはせ照らけり　求鳴

庭火かりやあかりやこゝと照らす　浄木

庭火ゆらりや光りし乱れ照る庭火　盛家

蜜蜂

神前は咲やらぬ花も蜜蜂り　瓢今

古池や蛙も問し蜜蜂り　同

蓬莱も薬缶ゆか蜜蜂り　以仙

ちりまし浮織りや花蜜蜂　定胤

蜜蜂もまめや鳥の出所の　正竹

過来の友や酌あふ酒の燗　昌房

川蝶網

風下や飛し里までもちらひ　庵竹

世のあんなひもつれし蝶ちらひ　和及

ふくれは風とやいらん蝶ちらひ　求吟

御前や網て狩笠の寺一川　連討

刷毛序

術略傳

去乙酉の初春より戌の冬まであまたの
折りて尾のまこやに往来折々帰ると
月に定連定むる花に交流あると月
日ごとやさきの會せし友に今日多くは
せぬ所の人に明日會ふ 生れ連衆の
多きところも一日の月一會の間に
なくなる後に伝へ加へたるを見る

此時に思ひ出せし文辭捨かねて
いかに竹ヶ鼻に雪籠して俳諧をくみ
中に行章閑しかり深きを撰て其名を
国くの句此里に捨かれ集て
たまを流すと号して梓に刻す
おそれ有ぬ

于時宝永三天臘月下澣
藪流下巴静寄南窓自序

刷毛序集

陽春

鶯も去年ゟ実なる、初音かな　月空庵 西河川
うくいすの鳴初めの氷柱かな　大坂 瓢竹
黄鳥や去ハ初と鳴る丹の節　ナコヤ 雅卜
鶯ハ餅さしに鳴く始かな　〃 湖雀
鶯も立派に鳴や多武の嵐　京 如風
うくひすの鳴てそれと、初音かな　ナコヤ 朝雀
鶯の声やよそし　山雪下　〃 捨石
黄鳥やおもはせふりの羽繕ひ　〃 都栖
うくひすや文選よみの鳴初め　ミノ 峯雪
鶯の花をちらしける橋ヶ下　ナコヤ 水尺
うくひすの尾の流れや桜の枝　茨乃

うくひすの寐覚へやけは梅の花　こう 八け
黄鳥や含むる梅にかい綾き　大坂 素紅
西風よそりゆきし人の匂ひかな　い 荆口
堅横の川や埋梅の枝所り　ナゴヤ 素渓
若梅の花ちは乾く白ひかな　い 東推
元年の日紅てりわたる梅かな　い 随挿
ちりしく腕やかきちらす梅の花　三河 白雪
あらし蜂来の花肌や梅の花　ナゴヤ 香水
おぼろ夜の月の陰根や梅の花　笠寺 在井
障子ちらし中より白しや梅の花　鳴海 林紅
雪見には香や雪寸日の屋根の雪　加 桃妖
朔日哉山桜嫌さらや梅見の花　キリ 還球
妻あ咲や大黒は梅の木も時かな　ミノ 如朴

木の芽の乳ちらは梅の苔かな　ナゴヤ 而立
こゑ見ゆる香のこぼれ出しや若菜売　ツシマ 野紅
大根は何ぞ雪のわかなに一つかな　ミノ 支考
七草やちらり雪間の音羽山　京 吾仲
浅草や芹の葉まで若菜摘　ミノ 素堂
戴ゐて雪のわかなかな　ナゴヤ 野木
一まくれ絵なる雪のわかなかな　イセ 涼莬
若菜かも種の匂ひや初若菜　大垣 千川
家持の歌まで摘むわか菜かな　ナゴヤ 雌通
田舎風やあれも若菜も摘まぬ　い 正枝
とつおつ雪の中のわかなかな　い 不識
出かけ摘む所の和歌なれや　い 八葉
途中腹ちらす若菜摘　い 巴郷

傘広き二人まちもんや春の雪　カサま 湖遊
ひさしくも荒地井りもとの[illegible]　ナコヤ 如瓶
いとゆふの光目和鳥の灯とゆう　まかり 海石
東風和や春ハ出遊ふ笹のうら　ナコヤ 狸星
あかりとさ庭の風やおかし蛙　ミノ 浮舟
こゝろふかきぬ猫の軒かな　笠寺 渚高
おちかゝしや若草境の菩提　ミ 葵水
菩提乃塔詞堂の畑白しかり　ナコヤ 推之
能う候どもまちもあり蕨乃花　口 眠猿

中春

田とらゝく佐渡の金山実さ有　巴静
加川ゝ重しゝ暁りぬ日乃承かな　江戸 嵐雪

出替り乃若りし春のかゝ日和かな　ナコヤ 羽童
出初りの嵐も定まき甘露所　ミノ 二卅
出代は夜ものかしや挙化花　ナコヤ 林蔦
梅か香の高土居のゆる彼岸かな　ミノ 甫堂
二布人今まこちへちかうや鶯有　口 魯九
人良白き鏡乃宿也鶯有　口 推之
桑の声ハ杉立 おゝけるうれ　ナコヤ 夾始
鐘乃音中まゝてあつくたわるかな　口 楚山
ちるまゝたるまき二日の朧月　ミノ 夕二
鶯夜ハ柳ハ古し笹の月　口 松星
花のしぬ印気ハ入居ふく柳かな　口 蘇井
川志見河曲見河蘇柳ゝの形　口 風外
青柳や春ゝハ雀のふかゆらき　口 芦角

井のもとの鐙にさしてうく柳かな　正勝
竹乃光を行きよし柳しぶ　林月
氷似の柳と総ひよ蛙一声　柳石
庭鳥は行ふ花とも加りけり　蟻角
隣の女は日乃目を仏も蛙かな　林下
行くさき形や蛙の小笠かな　新蕉
芽種に流れ行く水も蛙かな　新小
いさゝかを嫁に荒れて病むとも　和町
声はこゝに蛙に涼く蛙かな　出稚
黄鸝も高音に遊ぶ種下し　且栖
初学出るや花代の秋ながし　千丈
流し柳の酒杯る付き芽かな　通路
若草に清貢やちりちち貢　十舟

寺の芽茶の喰のこゝろよく候かな　亀洞
らくなからと計や在所の雉子の声　是柳
墓原や桂の花に高木履　朱拙
芽ぐむして開らぬ花の桂かな　一秀
御ありりこゝろよしの春桂　下志
幸の性やこゝの妻あるも苗代田　疎半
振舞の施遊のあつりや落の花　巴爪
吹けさく二月の風や落の塔　汰爪
芽の吾の弟子の雀は落ちて清める　星笑
行人の目とむる行く雲雀かな　萤石
いさゝめの網をかぶりて雀の巣　普石
朝雲雀さてもかねての春の月　竹為
杉椽を出てゆく夢燕一つかな　東雅

如人に羽をし風の身しるゝ燕かな　随柳

燕も借屋を娘し古巣かな　ミノ 之今

いつ見ても旅なる燕のかれ　口 芝外

客人に京の見の先なる燕かな　曽石

涅槃会乃白いや焼香乃古筆　六 少湖

木世木りも胡蝶も仰むいて白たら　支考

来春

前をぬく雛ハとの人か山姥かな　涼菟

雪盆も何ぞへまかぬのよ内裏雛　越中 捨貝

妹雛や姉と思ふしを行くさま桜　素紅

卯月ハとら子の節句と桃ハ咲かず　ナゴヤ 水也

香桜りの世話がなんの節句や桃の花　口 芦汰

水門やそれと雛の結ひんとり　イセ 燕説

菜飯のかをりや花の内裏様　古今 霧川

流さるゝ屋敷家まで階子や花なる鳥　如行

探ら人の夕日詣りかみさかな　口 吟水

岩千葉乃手を詣りさて猫柳　素定

雨作り一塩こともの脚ぞかな　凡外

伊勢さからおふや八十手にあり　六 貞郎

今別の後にこそあれ蔵さかみ力もの　巴静

幾組合までも雛のこゝろや　嘉 雖笠

藤蘇ハ花の蔵と日末は思流まじ　ミノ 石上

針才の居までハ雪をあれ本屋の共　嘉 古支

前ゃ京ゝ後ハ門ものたり　吐山

面白のかくらや桜まで茂　イセ 梅凡

春ゝはひとり天下虫や芸の花　ナゴヤ 素角
岩一雨香として聞もせ薫の夢　ミノ 呂巧
草足体と踏ぬく春の名残かな　大ガキ 琳扇
行春や居に新んく脈云と所　ミノ 一詠
四海涙春や絶く鳴ん丁　ナゴヤ 哥勇

孟夏

冷食の節句ともいはん衣更　ナゴヤ 夾始
初蚊屋にいつや子せたと狂はせん　推之
石川へ糞や仕捨ゝ郭公　ナゴヤ 斗旭
ほとゝぎす幾声帰そ七ツ寺　大ガキ 木因
かも声そ老の山越みる時鳥　ミノ 推文
夜をとホいれくゝ仕事いゝちら蜀多　ロ 東旭

ほとゝぎす猿まち首ゝ帰よかり　ロ 加遊
瘦て来れ猿の川かしや蜀魄　カサデラ 栴柯
一石の酒や黄ハ魚か時鳥　ミノ 団子
鶯に飽ぬころや ほとゝぎす　ロ 山石
蝦夷まても帰るわかれ郭公　ロ 山川
海山や広く吾うへと ほとゝぎす　凡外
ほとゝぎす声ハ竹まのやみ　素毫
蜀ゝ声を一度に出しけり哉　ミノ 水月
蜀魂帰や笠川の芦簾乃奥　音仲
散りもしに流れ川ゝ声ゝ時鳥　露川

五月よりは新韶篇変化なる今の変化にて鳥に駒いて和本に作絶歌を正風の変化に何ハ光ゝ人八海なき、

大手にハいかる時と景清といひ
同顔にしても勢ある時と去来といふ
是は蕉風の変化にハさらにかなり

はさ籬も白く梅にて白牡丹　巴静
咲きてハ砂糖をふし白牡丹　石上
若花は畑守みしく牡丹かな　卜志
雲と出て何やしの皺なる葉かな　求之
何の海味噌に古き出る新の若葉哉　素晩
朝露の梅を捨てゝ若葉このかな　湛水
一通りの若葉緑やかり嵐かな　松星
一銘瓶水てたかもにも杜若　蕎白
朝もさえん先そ渡ぬや杜若　水丹
鋳返やもと小池に清し杜若　国推

うのはなや大鼓の月のかり間乃宿　沾徒
卯乃花も咲や朝霜の月夜集　巴静
井のそや四五本ならむ大手杭　素角
蝶すも何かは出る麻の井　之令
白芥子乃てかりて散り寺若竹　遊糸
芥子花半分散りやこらの月　竹什
高木に鵯が来しやさハ芥子の花　虎泉
路瓶にはき側かる数居たの釘　東推

中集

笹鞍や布袋の膝に一童笑　独卜
仙洞も山家めきたる花ちゆき　吟求
百雨のうちうちゑんぼうく雑うか　呂巧

笠簑さへおもはすゝ免の不定免　二鳥
悟さへ八下手解さへ八雁この秋　巴游
雁さへ座数乃中や草むらに　露川
宰人八布の紀出す縁なさ　正勝
先まつ川宇治の織や文さ帝　湖雀
生きまて着抜出すや其の日も　夕雲
何やめ背影やきたの今宵かな　水圭
一世茶井戸の流や花ある免　香水
夕凪す戦さ共きあかおや花し　涼波
一ち添し拭う五月の花盛この秋　也静
数登め着をとりわ初雪ひ　其角
千手なる千の花さくまゝひの秋　野嵐
五月雨や雲もうたれる五月雨　千年

雁八竹川の流へ行灯や五月雨　三カワ 一柳
氷海をくみて田植の五月雨　紙中 路健
松風のとよみ語りや五月雨　ミノ 加翠
五月雨手茶わめのへおもしろし　ホ 兀山
五月雨や螢の物て竹たしまた　ミノ 加枝
数の声に扉を天窓よりかけて　団子
五月雨風に数ものゝ代に川面ひ　也山
山端をとうへまつかゆ志ハこの鄙　都柳
下を雑何を皺竹田植かな　巴静
山ゝハすもも笠おとし田植かな　松星
早乙女のさし仕方や水葵　ホ 水天
芸舞や何ゆふ男の茶筅　イセ 品女
麦ゝの馬や深気に汲ら海　ナゴヤ 和町

麦畑のかぎりはまだや の月かな草わ　林鳥
雨晴の日ハまた高し合歓の花　里旭
若竹に宮の水清し竹折戸　呂巧
萩垣にすゝき蘇乃のひらく　船春
上塗の鏝をこそ青嵐　林下
青梅やさんざん小児の手に石　夕雲
雨気もなうて下のゆかりの花　机雪
涼しく明日の氷室のまたくる　魚洄

末夏

呼り人をよそに涼しや団扇売　幸境
夕食ハ煮豆の食をはなしとき　林茂
何吟く胛宵の涼のはや蝉の声　剛和

戸をあけて蝶を追出せ道の雨　松寸
繪扇や金屏の影の蝉の声　蛍石
長き日に花ハ咲ねば行きかへる　遊之
甚だしく羽のうらうら蝶の鳥　世帆
日もまだ長く白雨の後の蓮の花　左江
濁りなき仁の花とは蓮の咲く　露川
人声の降そよぐ雨や老の夏　一帆
湯あがりの小性の髪の暑かな　子直
山ハ行きて松ハ若葉や極楽へ　自静
雲の峰あとになりけり雲の華　推之
門明て帆かけ川帝の朝の波　赤同
甚の子の帆かけて涼し水の上　如春
ちり人の氷波をよりはの月　若仲

瀬の音と似て涼しさ近や芦の月　浅九
川を越す人の涼しさ行や其の月　渕翠
笠に小性の花のみ浴ぶ青梅かな　林鏡
石川の流れ寄る日の寸志かな　旦梅
海涼し目を添へ人や寄る波　大川
姿鏡へ夢を取る人あるらん　砲石
水無月や風をあふりて夕涼み　涼鴻
一しほに押せども涼しや青柳く　呂竹
涼しさや何をも袖に入れて扇かな　蒲芝
涼しさの風の至極や川の秋　朝樵
二つ秋なき三つ星も照る月見哉　八峯
秋たつや紀三井の寺の毎の露　曽九
鳥羽に帆を上て立秋や稲の秋　厚石

白雨に洒し上てや稲遊し　亭年

立穐

穐の月と毎とふ佳や鼻の風　訥牛
夕涼を手まくら稲の穂の秋　夕湖
風も吹き雲の鐘やさしの穐　林月
わか井乃桜や加ゑ入稼の風　坐嵐
山風と鼻ふく仰し桔梗のこぼれ　芳石
雲来り白むさ露の花乱る　水上
須城の花見て咲る秋や女郎花　惟人
散りゆく山風やさく桐の葉かな　石柯
七夕や橋のなかよし寸かな　露川
加賀笠に星のかげよし海や今日　危言

朝ゆふも寺より明日のあかり哉　汲徳

蜻蛉の百度まゐりや川社　秋卜

念仏ハ老人酒しておもしろさ　ミノ 海老

松杉の中まて花見まうでかな　カヽ 自冬

杉落や葉蔭より出る庭清水　彰雀

君ゆゑに捨てもおこる蟋蟀　世静

出る中に音頭やまはしきそ　立悦

草をおこして暇たまはれ蟋蟀　推之

行さくら豆の畠々のまはりかな　拾石

あかすまて来れや菊の蝶蝶　素洗

光を見ては嵐の帰去来哉　東推

日ぐらしの声や夕日のこぼれけり　吐山

寺より鳥ハ飛行しは栗畑　梵山

中秋

八朔に何をめづらさん酒の花　京 夢河

猿猴の住みのまうりや宮の月　星鳩

琴爪の手がんだりは三ヶの月　文二

雨に杉は海士月見や庵の奥　セヽ 走秀

書我の下胡粉まて登れや月の月　露川

むかふとえし唐傍の松の月　東推

明月や蘭はうつりて桐の晴　任市

としの月世ハ限々金をむかふの西　京 撒士

月いの雲自月出豆腐に晴さる哉　ミ 支志

白雲に谷を離しむかふの月　喜 十丹

独還に葉ふりゐての月夜哉　湖家

思んすらか出てむかふの月　カヽ 北枝

明日まで待てや今日の月　宗乳

草の庵待宵しや今宵の月　哥山

十四夜の月はのさらに明の月　岱水

明月の座頭物しやそれ仏　桃水

満月や賓の入るて風なし　素竜

かいさま始負の通りや花の月　陳風

ほのほのと月も濡るやそれの花　杉雪

稲の穂より磯まで月も影なし　渕栈

先穂はなやか流れの庵の月　大彡

まつし月はなら花ゆれ　露黒

甘けらは東からさや唐芋子　世静

うら弁と急いや土まで娘し　細石

瓢箪ともきされ娘なり　尊丸

相識笠は足袋や来るけの生絹も　東門

鶏の声にて雨をかさね一つ飛し　如林

大勢の声て掛しく流かりる　竹露

ものの摘や恙すや入り夜時雨　竹石

放物もちらん秋なり露時雨　枝月

末燈

調ゝしは月を寝ひとるは落つ哉　野拔

年の尾の風に吹まくむさかへる　不識

松風はゝ尾花の入日かな　如楼

暗くさかる雨行の花上十数　手夾

定らぬ庵まくてや錦草　玉糀

葉ながれともいふ仁御ともいふ句　祖丸

秋風は一ゆり〳〵に膚寒さ　路小

一日蓮鏡人乃山亭をたつね彼芳蘭亭
独楽堂とものあつまりて八景西郡の
中より先老樹多き吐清池なと春
紅葉は岩と陣し枯葉風と磨きし
都て兎角の数浮ぶるもなかりし
松のうちに紅葉も月を埋

竹田落雁
栗本夜雨
南天夕照
枯木暮雪
支蔭帰帆
小池秋月

落ても一夜寝て行けさ　雲川
秋葉の落ちに一夜の雨　孔雪
南天も食ひと洗ふて入りのかし　兀山
三夕に宿る雪の枯木かな　東推
暮き蕪を[illegible]　随耕
洞庭に古し小池の秋の月　斗旭

落葉晴嵐
塔中晩鐘

吹く毛も波の木の葉や[illegible]　風牛
半ば雲に相撲や[illegible]　素旧
水の音声や山寺の[illegible]　雲川
草木根を寝数の[illegible]　東荷
山猿の白[illegible]　貞我
[illegible]　巴静
草木[illegible]　桃妖
猿の[illegible]菊や[illegible]清　流風
思ひ王[illegible]秋の[illegible]　哉の
[illegible]　十朶
[illegible]　見女
[illegible]　雲二
年[illegible]風[illegible]秋のくれ　帙考

なし紀行されしや和田峠　詞味

初冬

旅人の山を離れて時雨雲　枕爪
西行をとふや時雨の日そり笠　吟水
傘もたぬ庵ハかくれ無しくれ　貞静
北山の行手計りや卯しくれ　不清
傘のあるハ二羽也そらも悲しき　一凡
古川風の尖まてしくれ時雨かな　水主
何とふも先キ華ちる時雨て笑かな　梅芳
鷺ちらぬいつ行音や村時雨　吉仲
空行く雲の出たるや朝三くれ　芦角
楊ちる也散り掛しきや蛙かな　羽笠

四ツ手大焚木焚りや霰降る　支考
買てこそ冬や晴ぬ人雲乃雪　木之
郷しるし実の入出夜や夜寒の雲　利桂
熊坂の手柄也けり鷲鶏　法水
世の中の姥ぬこさや沸の岩を　巴静
新地ハやま勧ハいかに枯かな　一秀
其法を枯地の中の初霰申塚　路壺
くまかが落口に行かよひ病　其石
蒲団入頭中や枯乃木　不識
小寺かな木破儀も残りけり　護芳
水見るみ如くも見しや蒂黄椛　以通
絶えの冬こ枝ちらす霰こぼれ　露川
冬子の五音や帝中の松の風　晴風

曽我殿のこいやれはつまこの戸ぞ　ミノ 園山

白いきこえみや源氏の水仙花　京 芝眠

庭鳥のあつし見えては水仙花　石上

風の音とはきこえけり水仙花　水也

木からしの花も散りて松の枝　湖遼

榾小木も飛んで南やちる木の葉　ミノ 唯然

水底に倫をとらし岸の木の葉かな　李路

浮き沈み鮒の梅さきの葉かな　　勢和

おもし深や枇杷の花咲大江戸　ミノ 道舟

末の花や何を葉しもて枇杷の葉　加水

梅の草や作海のこころす代花　東川

喜び葫や虎の音らん花　大吾

草の花や茶井子咲すも名残花　布泉

茶の花や気のうつりし春の花　吐山

若葉をも日脚に雪の中　ミノ 理風

うれしきの花をなりて生海風　八葉

猪七も志るし

旧里は志らぬ国所の身をさし何ぞ人何もかも僕何し水木の春見とる

しかるを語る旅にも稽古阿波のわた取

おもい胸の胡奴ぞ春夜寒ならぬ雪を

取るべき物は花の枝もなく何にも有る

上部の人何とつぶす雅名忠鉄肝芳露を

らひかへる名もなき花のかたる人か

祝

先いとく梅ととしの名乃巻　芭蕉

梅咲し名なき名とおもひ入しとも　伊セ 芦本
月を日毎にはなれぬ花の匂ひ見え　同 二嘉
山風に声吹清き鶯かな　随柳
燭消て暁月見るや秋河原　三ノ 柏立
初雪の夢は涼しき朝かな　同 其十
古川の落つる形も笹の引わけ　喜 朱拙
古川や古川ちりしの家はなき　梅月

中冬

としつきに雪の降積 杭の先　京 扨之
一畑の根深や雪のうしろかな　花字
葉をもしや雪の山路の加賀女房　穂卜
枯て中やせ照る月よ田ひる雪　斗九

木の先は先のこと思ふ雪見かな　杜月
雪の夜や流合って麻布帯　手ヲ 雅白
あふさきに降るらん雪の水の雪　唯人
雪の花振るや色の指 子合　巴静
雪掃を第一席や古川か庵　危言
降雪に鐘は落ちしや沢の人　子 凱之
加ふりきの相国寺しや宮の花　乂洲
乗合の其の世は河野さき 基かな　露川
乾く獣の皮の寒さかな　剛和
上留利の三童ぞ出る寒さかな　素洛
起きても何は地蔵の寒さかな　枚風
十八歳は寒し 如月中　之今
為文字も久しぶり名の日　亮泉

梅さくら雛も佛事やきのふ日　二角
老をと切の奉公しやすきの日　逢志
知らぬ目の鞘を川す氷程ぐ　拙文
笹の葉乃ゆうも隠れや花汁の中　水石
下肖乃紅白はしなき申し雑汁　都雪
放鹿氣々嗟し師走と隣合ふ形　水也

末之

朧ハよ蔵那坊主ゝ絆程ど　若乃
猶風はよ雪の氣おハおかし八日次　机雪
朧ハや狗し寺ゝハ捧もし道　水也
梅の木よ小僧や杏ム寒に入　和卜
うる人は年の伊呂波を溺やきの中　燕說

寒梅ハ香炉の上よ志ほれとりけり　随九
空雛や道具と併てハ雲の浪　推之
明方乃煮壽も忘れし鉢叩　千爽
節季の山乃そろく如や律ゞれ　瓦山
神風乃らくしハ雑ム庭史哉　木之
奥ときら甚ぬよ働く師走ゞら　菊風
居風呂よ待や深山乃ゆうしの氣　抱月
うすもゝ世海と大ムの道具乃若　巴静
まち一匁へ行歳も如りやうしの氣　芦本

哥僊表

芭蕉庵桃青

八九間空で雨ふる柳哉
旅はかれし波の声風
鳥挙出て雲雀を掉に声つきて
湖しれ行方の花をまとめて
物ゝ星北中に参宮の月の照
行んゝん三年すゝめて旅をたのし

露川
巴静
呂芳
魚丹
二嶋

百韻表

鵜もまた寝よるる声のまゝつくまゝ
様ををいこけ来るゝ中の月
出てたのむ角力のそゝらなくて
此姿の川にはたてく寝かり嫁く

湖産
孤舟
旦梅
巴静

二十年先に達てみつ山の肌　子
よし／＼も替るし女之七条　雀
表草をと思ひをかるん随二慶　静
お家元にんそもいつら清しさ　栖

首尾

まりも去年の松と帰りぬかなり　東川
てらる江戸の木の廿日草の芽　巴静
御宝も闇と銀日ハかなたかな　夕二
硯あわししてる墓り盃　葵之
内はつきものの月　芦角
[illegible]の風[illegible]花の　東風
[illegible]小只[illegible]の梅[illegible]　柳雪
[illegible]てるよこ[illegible]たし[illegible]　凡丘

悲しく[illegible]果ぬる夜食的　湖中
初こと移[illegible]ハ[illegible]合歓の葉　集古
此中の月も[illegible]五月雨[illegible]　巴静
見[illegible]ぬるへ[illegible]の[illegible]　東川
[illegible]山も[illegible]湖[illegible]　葵水
生活の謎ハ鼻[illegible]也　夕二
[illegible]の[illegible]も[illegible]　東風
二[illegible]る[illegible]や一乗さ日乃鉄　芦角

哥仙一折

[illegible]のつゐ[illegible]　推之
[illegible]の[illegible]寸草木[illegible]　湖巷
信儀の淵の[illegible]　十升
[illegible]路せたん[illegible]　若識

嵩の月見てゆきし望る絶居　雲川
咲しく宮守りく世佛　巴静
らふらぬ湖治の堂の何東　虚
風わたりかかる一舟　之
いかなる人も生まれかはるちるぞみかん　識
膳を立ちて佛中のあるりは不　弁
大路まじの上を頂姫土気ある　静
残朝乃間に軸照の山　川
使ひ人もと花のをいろ出る荻の邑　之
三日ぶ月乃とつれ真なり　雀
石すれの雀にまかして秋たらて　弁
菜好法師にしらあらん　識
来たる浅黄も枯れ花も文　川

珍しきものの古き風小ふる手こと　静

百韻一折

雑ほしとこのねたるや松の月　巴静
上庵りあるとる膝乃湖を　二鳥
句雑乃前り野の風吹きて　呂巧
持といふ事しく如き春ちの時　蒼若
松の影に姉は世に帯　右上
十指艶ある雪の如く迎し　小什
猫のとる香を鼻に嫌て居る　凡外
二巾の袴に其の風なりけん　文仝
かりもなき遊れまた又探る一西　野嵐
百夜とまり夜豫宜の岩子　円子

山鳩ハ余所の七夕日くれて　林下
海行舟の行くる桃灯　哥山
言ふ宮ハ一港の外れハ並木まで　芝志
猿いはれしくもりしきかく　水月
黒やハまたも打ちかかる鯨の月　梅石
先しき立つる梅の棟梁　珠竹
出見えてま範の後の花中なる　曽石
天草陣かいて井ひ竹張　石上
何も一路風の老乃ちやを出替　竹什
生年始ありつくて農の行蓋へ　風外
駒出も添使ての猫を花ヶ呼　珠竹
屏風ヶ恙まる雛の小庵さも　山子

四十六韻

衣かへかきりゝあれとて梅ぶる　東雅
春雨降りて浮舟ましきる　羽笠
何事味噌を蝉も会ふヶ夏侍く　露川
我の勝負ももとる朧夜の物ヶ　斗旭
古布名ん衣の衣寒とよ人の　机雪
壽し水の浪の寸くれ膝の風　随梅
雲行もえゝ重ッ身し関東　旁和
見とめいつくれハ豊岩海道　吐山
發梅の蕨の出うりを讃岐まで　巴静
雜兵めるま死あふる別　推
薬ハ子れの月と花と来一家一貫　童
閑り早しまめうきまきりつ　雪
出替りを登る方閑も八専り　梅

きえ残る有ッる錦も只い今　川
秋をゆづりし山寺の奥　旭
夜寒さに身がはしみ若き後家　和
七ろうりぬる多さの端　山
川ものの月の三上に出て　静
今は夜ハ尾もおもはぬ時雨かな　推
露はかつてさらすちりめんの袖　柳
いろ海の浅瀬上手ある徳須磨　雪
花の香りの誘うけの松　乙
一眼も眼ももめしても花なりけり　和
おくれて立つる里の壹　旭

哥仙

波だにもあらは薮方に清水かな　涼菟
薮をかきわけ川のほとりに麦　巴静
腰掛の住合よしと鳥なくて　芦本
眠る夜に雪ふりしきる聲ぞしむらん　萬里
力瘤の桜に花の香羽の月　乙由
何おもしろき垣の瓢箪　菟
奮うの名を貼よ四十八　静
御倒さ候の志ならぬ花　本
垂ッては垣をうつても酒をのまず　里
杜丹に似て老しぬ雅　由
よわれぬせうふ遊び諸た嫁の後　菟
古事の一年をまでたおらぬ　静
扇の出ても一間の佛一庵　本

柚味噌の庵に鋸か狩らるゝ　里
年の暮に心ちよし竹の伴　由
よくもよく見るも顔なくなり　莵
去年をとは荒ても庵は庭の果　静
ちよりちよりと提と出る芋程　本
まいらせ候男役者も升　里
一言いへハ百とこたへる由かな　由
鰡・麺よ紙のしみと嘴く俎か分　莵
椒の補紗か芽と云々右子　静
侍人ハ扇ヶ十まし二夜の雪　本
浪人と石の延ぬ木曽塚　里
きんかや千々の情料理ハおかれけり　由
わすれ苗代を花のよれき　莵

花ちくあり障子の明るしん　静
若楓ふりし風の月ハ由を出て　本
河下にしさと石擅下る言ふあり　里
浅羅をのと西川とそれ以村か　由
ゆのの中まかにも神まうしぬ十八九　莵
ら秋ハ寒しやまてるまる　静
纏金をとらく大僧ニ東福寺　由
降るるとそてこ走るとの　里
二葉ゝ親くハ兄弟を待居り　本
咲きくれし五の構なれ　執筆

世吉

白味噌とてゝ立てや雪の朝　吟水
たゝへいまは風をあふく涼の風　任節

粉縫ある春さを寝るへとふめく　林月
根あらし若葉にけふの礼　一爪
男ならば秋をためしの雨の坂　半池
草ものかまくりや来るとすとて枯　巳静
猿まで給はる羽の日　亘枝
子の香ハ菊の虫鳴らの秋　随九
あさくしき座へ上てまで萩の花　露川
織る組ル雲の磨るの月ひとき　東雉
三日月雪ハいつまでと中らん　静
月果るや志のほまれ　水
乃ロの露肉もいつうきの思ひ　弟
これより祖も海土の風　川
蛛の膳り茶雑子粉糖漬　爪

桜さくらさくも峯の出千と　月
葉もさうなりや芋の川をも　九
酒ハ朝さと月ハ夕される　旭
峰にをよね寂しうて芋かしら　推
西行もない真つ澤に若生しるよ　静
茶頭をはなさぬ小鳥の山の茎　川
下萩あしやうに三月の風　節
瀬まくそとりて燕の又去る良　水
小屋に燈ハ藤の花もとなる　几
二階から行くに仰ぎ梯ぞかし　月
晩の果の出川ハやぶよりも　九
老の峯の澤せんを抹香の東日和　旭
わらら見きりし山も道場　推

鞆なしされて綱をあみ捨るゝを　静
橋の図取る月の出るとも川　川
雲知らぬ川ゆゑ嬉しき高き時鳥　節
さ匿しりて今菓乃ぼりしく　水
函美なり余りもの出られ傳田　凡
孫の神ゝけぶの節川　月
内まいわをいろと菓汁ト半の食し　九
きんれちく凡士やうし光るなり　旭
不身ありせ枕の為のかく天井　権
ちかし嵯峨の茶菓の香　静
盃の花ハ一所なりけりてしる　川
起りて川こゝろして窓出川つら　節
素名取り腰のゆかりし是名所　求

二日のもとまちかし花残のゐ　凡
華を踏鶴も赤紅の牛車　旭
ころも秋風二十八日　魏子

五十韻

旅の末の張脇に雪の花　水也
さそれて稲ん葉先菜摘抄　部柳
つゆ継の出家の当てこ甲斐　荻乃
日出かてなうく雲ハ一つる浮ん　世静
六代のの庭ハ出ん渡して出づる　翠雀
おゝ川らうゆきく冴ると川や　桜月
苟菜の役を出てて朝の月　八様
遠霞の男のい川も赤髪　魏子
一のとさ牛の帯のしもまさ　露川

山錦木を 蒔 新華・髪
志怨は世の織色つゝ節しられ
明ッ芳ッりし気えいれらし
高いと二道らぬらふ 妻似り
一瞬ふりあるる是の重ね
十日ら十カムれの香れ久し
應ゆ浅とり久らる芳りのあ月えん
偕昌ハ物がらしらまゝり我
几並しこも浪さ居れ月
老たハ海寝ハ庭恋の星を知
汲室の頃ら何よ縁もうら松
あり物をゝえとらう貴ふて作り花
子羽りえらり宿の一承午り

也 揮 の 杉 雀 月 芳 也 川 の 柳 雀 杉

出らうりの風流ら深しろ千色ゑむ
竹くまれ店ハ出えれも指の母
何ら室し中月見よ女尾ぶ
大根好す在 猿の後口子
一人何ゝ此様ハおかし喧嘩よ
包ぎ果ハ見ゐも物ゝの見とく
老られ御土一家へいそしくる都と
流まさいかしと 杜れき さく
册字の額ハおつりろ面ら泣かる
乾を好あハ こゝ物ふと杉り
後たしとハ案のうらそしや 晩の春
丁鴨おくれ 池ハさむしきさ
栗林の紅葉あもえゆく 秋上外

芳 月 柳 也 川 の 杉 雀 月 川 也 芳 雀

二まわりさまかしける出ん　柳
濡て候風の中より雨のふる　川
七色やしうき千瀬とうく　静
姉の常にいれし川かる住吉　菜
一筋に布施はまとくさそう　や
菓麺も瓶のまゝ名水に流し　の
古文をしゆ中白雲の虎　月
実盛の淡如何に夜下船ん月　静
名至まれ梅のなみくとたく　花
唐鳥の夜みちの梓の寺根り　柳
若葉をあけ赤渦の振舞　川
老化蓮いまた緑を好きて天蓮　月
若代もみへい由さり二月　紫

むかまゝや宿早あれの座掛の　執筆　左京
小林くらんのとりの雛守り
源武
降る未世家の山中の雪気色　露川
もんしとしろくもの川の旅　楚山
あつかふは繕をいためる初穂守　武通
酒と酒由なるの鳥まかり　林鳥
川風のあるまを流さる夕涼　程里
京と丹鳥の条川をふり　和早
織女もまつぶの枝に待ちかん　東雅
後って篠の一座の草のまま　芭静
あつ人掛けまかせて蓮の秋　執筆　雅下
不旦のちかに月を知らせう　助進

大井の井戸大河のなかれに出て　居ル
鎌倉よりの結構なる
旅の虚の揚ル世間の路　風
拝の一席の雲になし高く
家にハ筆らかくし早路出
わしるままを朝きおく御幸
見ルまま帰るを花にも中へし
気まま情ある山ハ鼻光
らくいすの毛のありや手水体
澤庵和尚いつありも夢
草なきとも物とハ明月ハ
いつまてしりし上る棕櫚の葉ら茶
源わの花か井戸一かにあら出し

山　川　芳　下　所　通　静　里　川　桃　下　芳　通

是この様なる一雪ハあらまし
梅白といふ物にも落花の力葉
三味ても吹人に後折くそし
なし好みにも好みなきおこれにて
笹ゆらんとうし出る世にも加ふ
兵衛盛りし銀山からの前し貴
かかる行き月の十六夜
老人ハ黄の日ん華そらすめて
小豆干しまた大仰てもとくて
有明ハ垣と花ひせしとにかけ
日ハ乾より露の香かちも行
風のての香ある　小六月
勝清れ出しして　貴師こふる

山　里　静　桃　川　山　所　芳　下　川　里　静　通

運ひ出のてらうらと所とう　卜
水ら川あかくれし暑さのいとまかす　推
月に指さゝれ斧の行方のすゝき　里
とうの声かぎる雛に家のかぎり　山
花のさくのみ分ふ前花籾なきのしよし　所
几に志るさこの暢にも昔柳　蔦
和年よ一生の庵の庭の鮮浅く　通
なかなか人家のなくに一夜寝つ際　川
戸明けに行轄まかに川と乾乳　推
几をかんぬちらうて草の無苦の更　静
前ちて鳥帰れ中川社　山
甲ももえる馬場の中原の寺　所
口軍る一食継ぎて明の室　川

さくれ八追手晦こ此らゆめん　卜
糸ゆれて原に忘しくなりけり　静
いろ葉乃飲み後を思ひつゝ　里
其の円へ観音経を朝の丹　蔦
呉苑手も何の審の年ゆるに　通
弱くみて志なし源氏乃里菴　卜
三家八百首の哥を昔折れ　推
きり川を湯ともやく仕事八風帰し　所
いける山の通り明かは朔日　山
まかせぬ我の心安さ草の宿　竹
七里一胴して晩み少人全　静

七十二候

佳はぬめの芳ほくや朧月　千夜
落ハ寸らき　佐妻ハ咲ハ　独下
為し曲ル根井乃垣ほ芽風吹て　不識
三年ふらく人めの声川ふあり　推之
飼られし仏ほそ荒しと去人留　雲川
さそり菜のまゆしおそりゆう　巴静
名由き山路の旅に御急　楚山
罷ハよかれと寄ハ去ンしや　以通
調ハさ酒を者も何の御身　下
世すりさき背戦を安食沢ふり　川
社替ゑ主の中に洲しき旭の松　之
てまの入まる其までくの宴　識
今日のはるけハあかと修せ峰　静

竺の月比寸もに蓑の月すぐも　夜
高ひの居物しけけりうるもの　通
夜ハて川ろうと次の並去　山
成桐の中八日ハ凧も石し　川
三をすあ二人の中ゝし母親　下
一助す相もりれさうる思日川　夜
宮寺のきみりの賀もよ去れなを　之
柴のうし部き割そ乃葉女の声　山
むれしらうりし夜徳治ハ白ひを　静
東日見詩ハ端戸し踏房し　識
迎ゝ月と晴らうやらめし縁　通
夜の脚そ西周を寄さ　抓四武　之
卯木の花のら川跣しもき　川

新發意も其鐘の声の代りとして　下
さまりかんきハ後の勤行　識
問ふ扉をゐるさる蕭の上　静
若君晴天にかる御あれ　山
さらしと部屋めいいく歩儀　直
刈穂の庭ハ新月ひかりど　下
江の人の顔ハ白露に愛かうく　川
師走は風の波合ゐるく　爽
甲斐月よ迄仕舞の行きし秋　識
猫をおさへて　梅を猫うり　之
不かしき火器の糖てうたきし　山
大暑につりき　扇の　甲斐子　静
毛雪後は花の芽を暖まて　爽

世間の医者のあるよあるねさうこ　川
年々に育しと思ひ心口を有明　下
立上りし後の畑の耕作　直
茶の桜蝋の夜の、明ききりそう　之
去れかい几帳をうち寄せぬれ　識
行燈はかり留守番いも見えさん　東
推
ものすいいらいらとせよしての　山
茶の書さを　桜の一二升　静
隣に待る　鶏の行程　下
月明く黄母衣きざらう浅黄　川
こしを鋏かる　臼の穂芦　之
秋よひし　菓子屋にかえとさせて　直
荒鄙を　花のきしきり　推

出ぬ光系嫁川の又写書　識
たのむとも竹の左ずが一の芋　夾
紫陽花の花ハ手細と候る夜　山
中も取る々甚の一つ蛸　静
浦島々原子見とこハ此流さき　下
行のるも蛙行の牛も蛙　川
内にはさ思出ぬ白帆で　之
稲荷機嫌子も松ハ前　遁
さめし杉縁振舞桃花の手　指
ねたと綱し蓮れりて　山
まつ川風の鼓あり音也　静
孫都にられた伊勢ゟ節清　推
水上ハ花れ絹と川わおられ川　夾

米分音ハ　酒屋なるらん　識
夜入さ出しの宴ハ涼ん笠　川
足のおきし桟をりまゝ　静
蔵野のうす肉名すつ見　遁
い川まく草の後もいい　夾
赤々花ハ花白り秋ハ梅み　推
水村山郭　香風のふく　執筆

百韻

満こと書き諧子年毎棒哉　羽童
在世なとも岩手も邪文　吐山
今久以寸八紙を記つれ書も前　勇和
らうなり圓へも　二三年ふり　机雪

足実の山家の月も一字の月　随柳
蔦かりし茎かへて弁ふかを花うき　斗旭
狭御の馬の行し組を滞光かく　露川
茶もいかよ流りし宗おいかり　東推
人の気をとらし御光の鐘の声　巴静
花の地獄のなかはさかへても　童
雨らハとあく出しの包嵐　山
右井れなかりし放りト花川　和
老武者ハ斯ん時もを石出き　雪
晦日の夜の星の方角　栟
郭公帰る形ハあかりけり　旭
行さ取記く行の絵見すり　川
花か一つハ洗濯との流見おく　推

氣根より雪の始まり続くし　静
宍尾の上を尾保住ぐり　和
酒も情もおも御こ花々　山
豆ゟ葛をあのくまれ如よ篁の月　川
俗のさぐや鉄量ハよ世にく　雪
鉢子出をなかしよろし盃の家　童
拙川け川くはりを娘ハ天ハ　旭
三孫くさりし宗孫乳ぬ庭の五なる　柳
右川を注をハらぬかあかまへい　推
俟始りよ風流ハ始は合歓の花　旭
味のいかやなを庭の酒一所　川
麦みなれ木さそゆくまで布衣の出　静
出れきん時雨となハ中しかん　和

直雲と月のかゝるなを心ざして　推
弦声青き夜ハ更めく竹　童
出往も引く入経山の庵の声　雪
とまんもすゝみ稀なり薫寸哉　川
勝つのの昼と日差と思ふかな　山
うれしさハ練とのゝくも亀る　柳
石唐まり茶々也ても岩の個　和
引かゝる石首君もまゝ行　旭
首節の星の連れの富士結るゝ　川
何のとゝ〇こゝ見よとすれちめ　静
冬枯木も根の張ののかれもせゝく　栖
大閑林の雅九　槍杭　推
腸虫りし葉しれ行人ハ雅　童

雨ゝ姉ゝすゝき凧ハ揺る志　雪
さみのらん真行方のちゝいの庵を　静
鷹携て　裳裾袂のまゝゝ出ん　川
女たらす売しハせまんを猿まゐこ　旭
揚のふゝりハこゝうろく白田　山
太りし月尽りと出すめと行汁　推
稲とハりまゝふ夏の凧巾　和
暖ふハりの匿名との匝氣殺　雪
うすへり二枚山なけし　尖　旭
滝音りしなふりせんゝ李闘　川
山路ハこゝ月しき勝ハ秋凧　童
古きもの乱ハ滴ねさの具足　山
祖父の五斤のゆんてはゝ幾川　柳

春の月ゆりし枝の松の声　和

あかきまゝ出る船のさしてし　静

八朔まゆくらい春ゝ葉うらう　旭

あかりもきと至りて御侍る　推

白雨り過る家の庭園の一君りり　亘

とまりおしあふ旅しいかりも　雪

温飩をと狂の魚かうて勝し音　静

久しき代の都月見る　川

伊予より伊勢路へ戻さ雲の羽　推

水うし出る海風のねめりしき　旭

訳備りく汁も気もききく八出を　梅

田舎ふ目りもこまへ律義さし　山

咲淀を橋と一夜よ絶の声　雪

木の葉ゝ炭ゝ雨ゝ木の葉ゝ　静

戸かくしの御足もとうく月夜　川

雲ゝ衣羽織の札もしるき比　和

下駄さへ罠ゝ不易明石　山

ちらんお様り伊の化りとの　梅

暑さ年やらの聡年ゝ故ゝは　旭

子をよふ雅三枝の海広く　亘

老ゆ茂まてらる之露の花ちり行　静

和尚の発ちり汚く寺　推

永日八作りも作り平きし　和

生紀用候の古寺海道　雪

篭買つゝ植子葉する肩て雨　亘

家鋪広く奥ゝのつまさ光　川

さの山を甘ぞらくるゝ松 楓
旅寝ちらしも ちらし雲の月
暮るゝ人の心をまかりしまゝ
[illegible]の[illegible]
凡そ[illegible]も 化粧
はもありしも 西も まだ山
[illegible] 朝と暮田と[illegible]
[illegible]川の[illegible]
暮[illegible]のあかの[illegible]の風
水[illegible] 緑の[illegible]麦
中[illegible]葉[illegible]
[illegible]頬ハ深の 類
[illegible]日[illegible]

推 翅 柳 皇 雪 山 川 静 山 和 皇 枰 静

小間所[illegible] 枡の泊ゞり
[illegible]
三万遍ゞ 新作ハ[illegible]
今[illegible]浮世のかの旅 の[illegible]
尾張の燕 美濃の駒鳥

推 和 雪 枰 山

京寺町二条上ル町
井筒屋庄兵衛板

[illegible]